

ハイファイデリティオーディオ ラジオ技術

第38回ベストステレオ・コンポ・グランプリ発表
第9回RGAAグラブ「音の展覧会」開催



第38回

ベスト・ステレオ・コンポ グランプリ

| | | |
|-----|-------------------------------|--------------------------------|
| 金 賞 | アクエフェーズ | M-6000 |
| 銀 賞 | フォステクス Zingali | G2000 TWENTY 1.12 |
| 銅 賞 | マランツ UnisonResearch ソニー | PM-11S2 P40 SCD-XA5400ES |

| | | |
|---------|------------------------------|----------|
| ロングラン賞 | オーディオテクニカ | AT33シリーズ |
| アナログ賞 | アクエフェーズ | C-27 |
| 技術開発賞 | MarkLevinson | No53 |
| ニューカマー賞 | デジタル・ドメイン RAIDHO Ayraシリーズ | |

金 賞

アクエフェーズ M-6000 (Mono)



¥892,500(1台)

銀賞

フォステクス G2000



¥1,260,000(ペア)

銀賞

Zingali TWENTY 1.12



¥2,730,000
(ペア)

銅賞

マランツ PM-11S2



¥399,000

銅賞

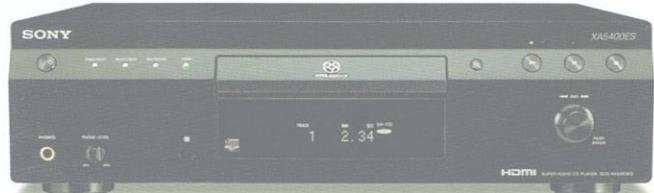
UnisonResearch P40/管球式



¥525,000

銅賞

ソニー SCD-XA5400ES



¥171,400

部門賞

スピーカ・システム

RAIDHO Acoustics Ayra C-1



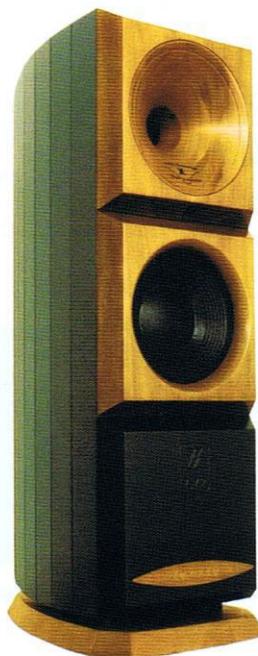
¥1,658,000
(ペア/スタンド付き)

RAIDHO Acoustics Ayra C-2



¥2,478,000(ペア)

Zingali TWENTY 1.12



¥2,730,000(ペア)

PASS Lab. SR-1



¥3,465,000(ペア)

第38回ベストステレオコンポグランプリ入賞製品

金・銀・銅賞および各部門賞製品

| 金賞 | アキュフェーズ M-6000 | |
|-----------------|--------------------|----------------------------|
| 銀賞 | → | フォステクス G2000 |
| | | Zingali TWENTY 1.12 |
| 銅賞 | マランツ PM-11S2 | |
| | UnisonResearch P40 | |
| | ソニー SCD-XA5400ES | |
| ロングラン賞 | オーディオテクニカ AT33シリーズ | |
| アナログ賞 | アキュフェーズ C-27 | |
| 技術開発賞 | Mark Levinson No53 | |
| ニューカマー賞 | デジタル・ドメイン | |
| | RAIDHO Ayraシリーズ | |
| 部門賞 | | |
| 部門 | メーカー | 製品名 |
| デジタル・オーディオ・プレーヤ | マランツ | SA-15S2 |
| | ソニー | SCD-XA5400ES |
| | アキュフェーズ | DP-400 |
| | アキュフェーズ | DP-600 |
| | デノン | DCD-SX |
| | CHORD | CODA+QBD76 |
| | Mark Levinson | No512 |
| プリアンプ | QUAD | 99 Preamplifier |
| | アキュフェーズ | C-2110 |
| パワー・アンプ | QUAD | 909 Stereo Power Amplifier |
| | アキュフェーズ | P-4100 |
| | デジタル・ドメイン | B-1a |
| | テクニカルブレーン | TBP-Zero/S |
| | Mark Levinson | No532 |
| | QUAD | 99 Mono Power Amplifier |
| | アキュフェーズ | M-6000 |
| | Mark Levinson | No53 |
| | テクニカルブレーン | TBP-Zero Ver.2.0 |
| プリーメイン・アンプ | アキュフェーズ | E-250 |
| | マランツ | PM-11S2 |
| | UnisonResearch | P40/管球式 |
| | デノン | PMA-SX |
| スピーカ・システム | JVC | SX-M7 |
| | JBL | TS8000 |
| | DALI | HELICON400Mk2LE |
| | フォステクス | G2000 |
| | RAIDHO Acoustics | Ayra C-1 |
| | RAIDHO Acoustics | Ayra C-2 |
| | Zingali | TWENTY 1.12 |
| | PASS Lab. | SR-1 |
| | オーディオテクニカ | AT33EV |
| | オーディオテクニカ | AT2000T |
| アナログ関連機器 | アキュフェーズ | C-27 |
| | アキュフェーズ | DG-48 |
| | デジタル・ドメイン | D-1a |

22 L 2 は、見掛け上のピアノ・フィニッシュで、それが音のつややかさとか伸びに影響しただろうなということは推測できます。

SX-M 3 をベースに造られた SX-M 7 は、上は M 3 とほとんど同じですが、下につけたダブル・ウーファの押さえかたが M 3 に比べていい加減で——こういっていいかどうかですが——それが幸いしてか低音をつまらせなかった。それが総合的に見てたっぷりした音につながってます。私にいわせると、“ケガの功名”的なシステムということでしょうか。

TS-8000 は、大型ウーファとホーンを組合わせた JBL 的なシステムに比べると、いかにも今風のヨーロッパ的なはやりの路線のものですが、さすがに JBL で、押さえどころはちゃんとしていて、キチンとしたりっぽな音になってる。初めて使ったマグネシウム合金の振動板もうまく使いこなしてますね。ソツがない。JBL の底力みたいなものがここに現われています。海外製のシステムの中では安いです。あれだけの構成でこの値段というのは、C/P 賞を上げてもいいくらいです。

Helicon はトールボーイにしてリボン・トゥイーターを使うようになってから、メチャクチャに周波数特性が平らなんですね。音を聴いても非常にスムーズなバランスで、リボン特有の繊細さが生きている。誰が聴いても異論のとなえようがない音がする。小型ウーファを 2 つ使って低域をカバーするやりかたは流行の手法ですが、エンクロージャの仕上げはかなり手の込んだピアノ・フィニッシュで、そのよい影響の出た優秀なスピーカだと思います。

菅野 もう、あまりつけ加えることはないです。特に上の 2 つは安いですから、お買得的な面も考えて 4 点を入れました。音には、やや不満な点はあります。

SX-M 7 は、ダブル・ウーファで低域を豊かにして全体のバランスがよくなかった。ケガかどうかは別として(笑)。

TS-8000 は、石田さんのいわれる如く、JBL とみてみればまったくちがう方向、むしろ、むかしかったヨーロッパ JBL のようなイメージの製品ですけど、感心するのは DD 66000 と同じ設計者の設計だということですね。同じ設計者が新しい素材とダイレクト・ラジエータを使ってソツなくまとめるあたりは、すごい職人ですよ。たいしたもので。これは評価したいですね。まあ、JBL としても、こういう系列の商品も必要なんでしょう。

Helicon は代表的なデンマーク・スピーカです。リ

ポンとダイレクト・ラジエータをつけたシステムとして、非常に完成度の高いシステムです。あの大きさでのフィニッシュ、見事ですね。

これは、1種の記念モデルらしいですね。

石田 25 周年記念だとか。

金井 今年はマグネシウム振動板を使ったシステムが目立ちましたね。ピクターと JBL、これから出てくるフォステクス、ほかにも製品はあるようですね。それもピュアと合金と 2 種類あるのがおもしろい。

SX-M 7 ですが、技術屋さんは SX-M 3 にも思い入れがあったようですが、これは新しい SX-M 7 が入賞となるのが順当だろうと思います。

TS-8000 は、みなさんのいわれるとおり、JBL からこういうものが出来たのはやや意外でした。聴いて太鼓の音が他のスピーカと違うのがおもしろかったです。ミヨーの「打楽器とオーケストラのための作品 109」で、大太鼓がふつうはドンドンという感じながら、TS-8000 はドラマーがよくいうところのドフッドフッという音が出た。

Helicon は、よくこれだけ違う形式のユニットを使って実にじょうずにまとめてるな、と思いました。石田さんはこの上の 800 というモデルもお聴きだそうですが、いかがでした？

石田 大きいなりのよさはありましたけど、全体のキリッとした完成度の高さでは 400 MK 2 LF の方が好きですね。この 400 は MK 2 になったときにすでにそうなんですが、DALI の最高級のユーフォニアというシステムの造りをほとんど取り入れているんです。

スピーカ・システム②

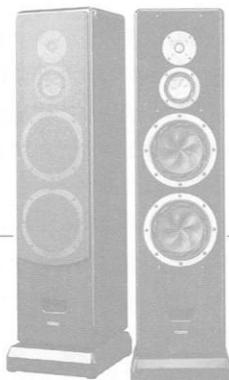
| 型 名 | 価格(ペア) | 得点 | 平均 |
|-----------------|-----------|----|------|
| フォステクス G2000 | 1,260,000 | 20 | 5.0 |
| RAIDHO Ayra C-1 | 1,658,000 | 16 | 4.0 |
| RAIDHO Ayra C-2 | 2,478,000 | 16 | 4.0 |
| ジンガリ TWENTY1.12 | 2,730,000 | 19 | 4.75 |
| Pass Lab SR-1 | 3,465,000 | 18 | 4.5 |
| RAIDHO Ayra C-3 | 3,570,000 | 14 | 3.5 |

金井 この部門は 6 機種がエントリーされています。Ayra は C 1 から C 3 まであって少し多すぎると思うんですが、取扱商社がぜひお願いしたいということでしたので、こうなりました。

審査の結果、フォステクス G 2000、RHIDO Ayra C 1、同じく Ayra C 2、ジンガリ TWENTY 1.12、

第38回ステレオ・コンポ・グランプリ審査会

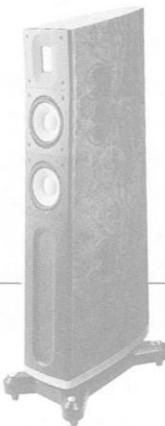
●フォステクス G-2000



◀ RAIDHO
Ayra C-1



RAIDHO ▶
Ayra C-2



Pass Lab SR-1が入賞となりました。

菅野 Ayra C3は落ちてもしょうがないな。なんといつても Ayra はC1が最高ですね。

石田 僕は、あの足が気に入らないんですが、でも、あれがあの音を創っているんだったら認めざるをえないですね。

高橋 びっくりするくらい低域がいいですね。

菅野 あれをゴリゴリのふつうの足に載せたら、ぜんぜんダメでした。

G-2000はフォステクスとしての本格的な最高級システムですが、これはたいへん優秀なスタッフに恵まれて、おまけに最高のユニット技術を生かして世界中でどこ探してもないようなものを造り出してまとめたもので、形はどうもいただけませんが、音は最高でした。それで5点。

金井 全員5点というのは、スピーカーでは考えられない得点ですよ。多分いままでにはなかったはずです。

菅野 僕は“面食い”ですから、ああいうバイアスがかかってしまうと、いい評価をすることはほとんどないんですが、それが音を聴いてびっくりした。

ピュア・マグネシウムをそこまで絞って成型するのはたいへんらしい。それがHR型のミッド・レンジで、それができてG-2000が完成したんでしょう。最高の持玉を使って熟練の技術者の豊富な経験がまとめたすばらしいスピーカですね。

ただ、どうも見た目の色は好きじゃないです。ヴァイオリン・レッドとかいってますけど、ちょっとセンスが足りない。もっと美しく仕上げてほしい。

Ayra C1は、私が最近もっとも強い印象を受けたスピーカです。ただし、ここは1コ1コ手造りで仕上げたり、どうもまだメーカーの体をなしていないところもあって、ふつうなら見落さないようなところに手

落ちがある。大振幅に弱いのもその1つですね。半面、いままでになかったいい点もあります。

音はといえば、これは魔薬的にいいです。リボン・トゥイーターがどうしてあんなに指向性が広いのか、僕には理解できません。あの高音の魅力には非常に強い印象を受けました。

さらに強い印象を受けたのは、例のボール・ペアリングの上に載せたフラフラ揺れる台ですね。ふつうのマニアが見たら下の下の評価しかしないような足。かっこうはいいけど、あのガタガタフラフラの足がこれでなきゃという音を聴かせてくれる。試みにいろんな足に載せてみましたが、全部ダメでした。重くて硬い足ほどダメ。これを設計したのは振動工学の専門家だということで、これは少し考えなきゃいけないな、と思いました。これには大きな示唆を受けました。

大入力さえ入れなければC1がいちばんいい。C2もこれに準じますが、こちらはトールボーイ型で、下にペアリングが入っている点は同じです。この2つは、尺度が違った意味で、いいところと悪いところが混在しているきわめて魅力的なスピーカでした。

TWENTY 1.12は、ジンガリを見直させてくれました。JBLのユニットを使ったかってのジンガリのあの猛々しく勇ましいイメージから一変した音で、「これがほんとうにジンガリ?」と思いましたね。くり抜きのホーンもきれいだし、コンプレッション・ドライバを使っていながら中庸を得た質感、それでいてあのドライバでないと出てこない前に出てくる音の鳴りっぷりは、すばらしいですね。使っていちばん安心するスピーカだと思いました。

Pass Labは以前にRushmoreといういいスピーカを出して感心させられましたが、あれはアンプつきのアクティヴ・スピーカだった。だもので、値段も高

くなつたし重くもなつて、そうたくさん売れなかつたんだろうと思うんです。それでこんどはふつうのスピーカを造つた。長時間聴いたわけではありませんが、なかなかいいスピーカでした。ネルソン・パスという人は、耳がいいんですね。単なるアンプ設計技術者でないことが、今回明白にわかりました。

Ayra C 3はこのシリーズの最高機種で、まとまりはいいんですが、独特のおもしろさはない。確かに口径も大きくてユニットも増えているぶん大入力に対しては安定していますけど、ある意味で平凡です。それで4点としました。

高橋 G-2000ですが、NHK モニタの RS-N 2で始まつた HR 形状のコーンは、見るからに異和感があって好きじゃなかつたんですが、ハイパボリックとパラボリックの2つのカーブで共振を分散させるといつたいかにもユニット・メーカーらしい設計だし、ピュア・マグネシウムという加工性の悪い材料を見事に使いこなした中音を造り、トゥイータではリッジ・ドームという軸非対称につき合わせて高域共振点を上げてピークを抑えたりと、ある意味ではいかにも日本のメーカーらしいテクノロジーをフルに使って3.5ウェイにまとめたシステムです。色は2色、ヴァイオリン・レッドとファゴット・ブラウンがあつて、あとの方が落着いて見えます。しかし形の特異さから来る印象とは違つて、音は実にすばらしいものです。

いままではOEMメーカーとして市販について少し遠慮があったかもしれません、新しい技術屋さんが加わつて日本のスピーカ技術の最高峰のものをつぎ込んだ結果、といつていいく思います。

Ayra C 1, C 2は確かに不思議なスピーカです。いちばん惚れ込んだのは、手造りのウーファです。これはスピーカをいじつて来た人間としては、見た目だけでチャーミング、音は出なくともいい、というくらいのものです。特に磁気回路が、フレームを2分割して磁気回路をネジ止めるとか、熱に弱いとされるネオジウム磁石を10コ上下に分けて、放熱を兼ねた磁極を後ろに背負わせるとか、あれにはしごれました。

菅野 カッコイイものね。

高橋 C 1の音は菅野さんと同様、感激しました。

菅野 あのスタンドを使ってですか。

高橋 そうです。実は、スピーカを支えるためのああいう考えかたは、ずいぶん前に本誌で石塚峻氏の“コロ”の形で発表されていて、多くのマニアがさんざん試して来て評価されてるんです。

金井 あれはもう15年くらい前のことですね。

高橋 音のリアクションを質量だけで受止めるという考え方たですが、とにかくあの口径のウーファからとは信じられないような低音が出る。それと非常に大きな面積のリボン風トゥイータからかなり広い指向性がえられているとか、合わせて非常に魅力あるスピーカだと思いました。

1つだけ気になったのは、ウーファとトゥイータの放射軸が水平より上に向いていて、垂直方向のフォーカスが不安定なことですね。その傾向はC 2, C 3ではより強くなつて、それが気になりました。

最近は時間軸を削えて音を1点に集めるという設計のものが多くなつていますが、それだと1点をはずれると、まとまつた音が聴こえない欠点があります。

金井 1点はいいんですけどね。C 3では特に気になりました。

高橋 そうです。C 3はふつうの音に近かつたという菅野さんの感想も、多分そのあたりが関係してるんじゃないかなと思います。

いずれにせよ、こういう新しい発想・新しい技術が製品として出て来るのは、これから楽しみですね。

もったいないなと思ったのは正面のむき出しの金属のバッフルに黒いユニットが見えるんですが、それだと美しい木目が見えない。北欧家具の持つ伝統的な外観を損ねています。ちょっと勿体ないと思いました。

ジンガリはすでに春先に聴いていて、びっくりしました。僕が追っかけて来た音と同じ音がする。それは何かといえば、2つなり3つなりのユニットのつなぎ目が入力波形に対して忠実な応答性を持っているということなんです。そのあとでロッキーに頼んで単発サイン波でクロス点のつながりを見たら、4機種ともそなつたんです。彼らは何もコメントしてないんで

